







この物語では最後に全員死ぬことになっているが、ぼくは最後に一人の兵隊が逃げて次の地点で守る連隊長に報告することにしようと思った。だが、長くなるので全員玉砕にしたが、事実とはなりの地区を守っていた混成三連隊の連隊長は、この玉砕事件についてこういった。「あの場所をなぜ、そうまでにして守らねばならなかったのか」

ぼくはそれを耳にしたとき「フハッ」と空しい嘆息(ためいき)みたいな言葉が出るだけだった。

あの場所をそうまでにして……、なんという空しい言葉だろう、死人(戦死者)に口はない。ぼくは戦記物をかくとわけのわからない怒りがこみ上げてきて仕方がない。多分戦死者の霊がそうさせるのではないかと思う。

一九九一年八月